

待降節第2主日礼拝説教「約束をお忘れなく」

日本基督教団石神井教会 2018年12月9日

【旧約聖書日課】イザヤ書 55章1～11節

- 1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。
銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。
来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
- 2 なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、
飢えを満たさぬもののために労するのか。
わたしに聞き従えば、良いものを食べることができる。
あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。
- 3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。
わたしはあなたたちととしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。
- 4 見よ、かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし、諸国民の指導者、統治者とした。
- 5 今、あなたは知らなかった国に呼びかける。
あなたを知らなかった国は、あなたのもとに馳せ参じるであろう。
あなたの神である主、あなたに輝きを与えられるイスラエルの聖なる神のゆえに。
- 6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。
- 7 神に逆らう者はその道を離れ、悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに救ってください。
- 8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、
わたしの道はあなたたちの道と異なると、主は言われる。
- 9 天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、
わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている。
- 10 雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。
- 11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も
むなくは、わたしのもとに戻らない。
それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 15章4～13節

- 4かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができますのです。5忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、6心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。
- 7だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。8わたしは言う。キリストは神の真実を現すために、割礼ある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり、9異邦人が神をその憐れみのゆえにたたえるようになるためです。
- 「そのため、わたしは異邦人の中であなたをたたえ、あなたの名をほめ歌おう」と書いてあるとおりです。10また、
「異邦人よ、主の民と共に喜び」と言われ、11更に、
「すべての異邦人よ、主をたたえよ。すべての民は主を賛美せよ。」
と書かれています。12また、イザヤはこう言っています。
「エッサイの根から芽が現れ、異邦人を治めるために立ち上がる。
異邦人は彼に望みをかける。」
- 13希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるよう。

「すべての異邦人よ！」

クリスマスを迎える備えのときとして過ごす「アドヴェント」にリースを飾り、特別なロウソクを灯すという習慣は、ドイツのキリスト者の中から始まったと言われていますが、それが広く教会の営みの中に位置づけられるようになったのは、20世紀の北米の教会でのことのように思われます。わたしたち日本の教会でこの習慣が受け入れられるようになったのはこの数十年のことですが、今では、プロテスタントでもカトリックでもほとんどの教会が当たり前のように取り入れています。

その「アドヴェントのロウソク」の四本に、この期節の祈りを込めて、それぞれに名がつけられていることをお聞きになられたことのある方もいらっしゃるでしょう。よく知られているのは、四本のロウソクをそれぞれ、「希望」、「平和」、「喜び」、「愛」と名づけて呼ぶ習慣です。その起源ははっきりしませんが、今日の聖書日課・使徒書（ローマの信徒への手紙 15 章）の箇所には、そのうちの三つ、「希望」と「平和」と「喜び」が繰り返し出てきていました。

この箇所は、伝統的にアドヴェント（待降節）に読まれてきた御言葉です。この期節の祈りが、何よりも来るべき方に対する「希望」によって方向づけられると理解されてきたからです。しかも、その希望とは、何か曖昧な期待ではありません。「来るべき方は、何よりも《異邦人の救い主》としておいでになられる」という希望です。それは、旧約の預言者たちが、すでに古い時代に、神の約束してくださったこととして繰り返し告げていたことでした。そして、主イエスと出会った弟子たちが、主の十字架と復活の後に、「まさにこの方こそ、預言者たちの告げていた、来るべき方。《異邦人の救い主》としておいでください、わたしたちすべての者を、共に神の民とし、共に喜び共に神を讃美する者としてくださるお方」と信じ、宣べ伝えることになったことでした。

世界中の三人に一人がキリスト教徒と数えられるという時代に生きているわたしたちには、ピンと来ないことかもしれません。けれども、初代の教会の人々にとっては、だれもが分け隔てなく同じ神を信じる者として受け入れ合い、喜びを分かち合い、共に神を讃美するようになるということは、驚くべきことでした。あり得ないことだとさえ、思われていたのでしょうか。けれども、主イエスに従った者たちは、その壁を越え得たのです。古の預言者が告げたことは、遥かなる希望に過ぎないのではない、今まさに主イエスが実現する道を拓いてくださった、そして、いつか必ず完全に実現する確かな希望なのだ、と。

今ここに集っているわたしたちも、聖書の語るところから見れば、「異邦人」です。かつては聖書の民ではなかったにもかかわらず、聖書の告げる神のもとに共に集められる者となりました。主を讃美する者として、ここに招かれてきました。アドヴェントは、まさに、わたしたちがここに招かれ、集められていることを、希望の実現として喜び、感謝するときです。

そうであればこそ、今もアドヴェントに「希望」のロウソクを灯し続けるわたしたちは、なおこれが完全な実現に至る途上の希望であることを、心に留めたいのです。《異邦人の救い主》は、まだ多くの人々を待たれているのです。

互いに相手を受け入れて

使徒書日課（ローマ書）で、使徒パウロは、希望を語りました。忍耐と慰めが求められる現実であるとしても、なお希望を持ち続けることができる、と教えています。パウロの時代には、いまだキリスト教会は小さな集団で、権力者がその気になればいつでも消し飛ばされてしまうような存在だったのです。けれども、パウロが本当の意味で忍耐と慰めを必要とする現実があると見ていたのは、教会の外の世界でのことではなく、教会の中でのことだったようです。パウロは、この手紙の前の章から、教会の中にある分断、互いに対する隔ての壁を取り除いて、互いを受け入れ合うべきことを、言葉を重ねて教えようとしているのです。

「**神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい**」。この勧めは、二千年前のローマの教会の人々に向けて語られた言葉ですが、アドヴェントの祈りへと導かれたわたしたちに向けられたものでもあるでしょう。何となれば、表面的なことではなく、わたしたちが本当に、互いに相手を受け入れ合う者として、ここで共に喜び、共に神を讃美する歌を歌うことができているならば、何かが起こるはずなのです。わたしたちの営むことを見て、まだ教会の扉の外にいらっしやる《現代の異邦人》たちが、わたしたちのお迎えした主に望みをかけるようになる。そうであるに違いないのではないのでしょうか。

今から 76 年前のアドヴェントに、家族と共に自宅で自死したドイツの著名な作家がいました。先ほど歌った讃美歌 243 番「闇は深まり」を作詞したヨッヘン・クレッパーです。彼は、牧師の家庭に生まれ育ち、若くして作家として名を成しましたが、二人の娘を持つユダヤ人女性と結婚したことで困難な生活を窮めることとなり、その中で宗教詩を書き続けました。その多くが、戦後のドイツの教会で讃美歌として歌われるようになり、わたしたちの『讃美歌 21』にも三曲、採用されたのです（他は 273 番と 472 番）。どの歌にも、深い闇の夜の現実が横たわっています。朝を迎える希望を歌いながら、実際には、暗闇の中にまだ留まっているようです。クレッパー自身の置かれた立場が、そうだったのです。彼自身は、朝を迎えるまでを忍耐して待つことができず、自死を選ばざるをえませんでした。それでも、朝を迎える希望を語り、慰めを得ていたのでしょう。

「**すべての異邦人よ、主をたたえよ。すべての民は主を賛美せよ**」。使徒パウロは、この御言葉を、異邦人らに向けてではなく、教会の人々に向けて、語っています。「あなたたちの教会は、そのような教会になるのだ」と、希望をもって呼びかけているのです。

4 世紀のミラノの司教アンブロシウスが東方教会で歌われていた聖歌にならって作したラテン語聖歌の一つ、「来ませ、異邦人の救い主よ」を 16 世紀の改革者 M.ルターがほとんど逐語訳でドイツ語にした讃美歌「いま来たりませ」（229 番）を、待降節の間、礼拝の終わりで繰り返し歌うことにしています。自分たちのためだけでなく、すべての人のために、クリスマスに備えるアドヴェントの祈りを、わたしたちは、この期節に、心して讃美し歌いたいのです。

わたしたちの希望の源

「アドヴェント」に、わたしたちは、「希望」を語ります。それは、実現するか分からないような儚い夢を語ることはありません。すでに、主イエス・キリストがご自身と弟子たちとの間で実現されたことを、今、わたしたち自身の中でも必ず実現することとして望もうとしているのです。

この「希望」は、決して空しく終わるものではありません。何となれば、わたしたち自身が始めたことではなく、神がお始めくださったことに基づくことだからです。かつて預言者を通して、「**わたしのもとに来るがよい**」とお告げくださったお方が、御自らお始めくださったのです。神のもとに来ることの遅い者たちのために、御自らおいでくださることによって、お始めくださったのです。使徒パウロも、神こそが「**希望の源である**」と言っていました。

そうであれば、わたしは、「待降節」という立派な日本語があるにもかかわらず、「アドヴェント」というカタカナの用語を、多く用いるのです。「待降」は、「降誕を待ち望む」という意味を当てた用語です。わたしたちは、「待降節」に、主のご降誕を待ち望み、来たるクリスマスの祝いに備えることに、心を費やします。まさに、新しく誕生する命を迎えるための備えをする家族のように、です。それも大切なことでしょう。けれども、その「新しい命」は、あくまで与えられるもの、授かるもの、わたしたちの思いとは異なるところからやって来るもの、として受け入れるべき存在であるはずで、決してわたしたちが入念な準備をして自分の手で作り上げるものではないでしょう。それは、わたしたちの準備が完了したかどうかということとさえ無関係に、「新しい命」そのものの持つ「そのとき」が来れば、わたしたちのもとにやって来るものなのではないでしょうか。「アドヴェント」という語には、そのような「そのとき」の「到来」、わたしたちの意志ではなく訪れて来る者の「来臨」ということの意味が込められているのです。そのような意味を明らかにしようとして、聖公会の教会は、この期節のことを「降臨節」と呼ぶのです。

先週、わたしたちの教会は、一人の兄弟の地上の生涯の終わりを共に迎え、明日、明後日と葬りの式を執り行おうとしています。病気を得られてから二年近くの療養生活を通して、もちろん病の癒されることを願って行動もされてきましたが、ご自身の最期のときを迎えるための備えもして来られました。終の棲家とするホスピスを自らお選びになられて、最期の 50 日を過ごされました。教会の多くの方が、そこをお訪ねくださいました。兄弟がそこでなされたことは、自ら積極的に何かを為すことではありませんでした。その日の訪れに備えて、静かに祈り、一人でも多くの人と共に過ごすことでした。その日の訪れとともに、主をお迎えし、主の前に立つ者とされるために、備えられたのです。

わたしたちのアドヴェントの祈りを、兄弟は共に祈り、整えてくれました。主をお迎えする者となるために、わたしたちを受け入れてくださった神をお迎えして御前に立たせていただくために、わたしたちは、まだ閉ざされているわたしたちの中の扉を一つ、また一つ、祈りのうちに開いていくのです。